

公益財団法人筑紫野市文化振興財団〈文化活動／アウトリーチ事業〉  
小学生のための表現活動ワークショップ&平田オリザ講演会  
山口小学校事業名「平田オリザさんが山口小学校にやってくる！」

## 活動報告

主催 公益財団法人筑紫野市文化振興財団／筑紫野市教育委員会  
共催 ふくおか教育を考える会協議会

2017年度7月「オリザさんと演劇を作る」から始まった、筑紫野市文化会館・筑紫野市教育委員会と協働でおこなったこの事業は、今年度で3年目となりました。2年目は2018年度9月2日市小学校6年生にアウトリーチ、12月に文化会館での小・中学生対象の1日ワークショップを実施。

今年2019年度（2020年2月）は山口小学校6年生へのアウトリーチと筑紫野市内教職員・教育委員会・文化会館職員・一般向けの講演会をおこないました。演劇コミュニケーション授業を実施した二日市東小学校6年生の先生方の発表もありました。

## 平田オリザさんが山口小学校にやってくる！

場所：山口小学校 日時 2020年2月12日

講師：平田オリザ アシスタント：中嶋さと

授業：「転校生がやってきた」

6年生2クラス 1時間目から4時間目まで

見学者参加人数：27名

（広め隊14名、市議会議員2名、教育委員4名、教育長・教育委員会2名、PTA1名、会館職員など4名）

「転校生がやってきた」は、2002年から中学校1年生の国語教科書（三省堂）に載っているオリザさんが開発した、一クラス3コマの授業です。2クラスの際は4コマで3コマ目を同時進行、4コマ目の発表を2クラス合同で行います。この日は特別に山口小学校にお願いして1コマ50分授業で行いました。（いつもは45分でやっています。）

授業はオリザさんがテキスト「転校生がやってきた」を使って説明します。子ども達は6、7人の班に分かれて話し合います。役柄を決めて、テレビ番組の名前を決めて、台詞を自分の言葉に書き変えて発表します。「アメリカから転校してきたバ・ナーナさん」と名前がフルーツになったり。友達が作っ



た台詞や面白い演技に、笑いが起こります。オリザさんに「ウけるコツはサッカーのシュートのようにゴールギリギリのところを狙うこと」「ぼけたらツッコミを入れる」と教えてもらって、子ども達の創造がどんどん膨らんでいきました。最後は発表とふりかえり。自分たちのよかったところ、他の班の面白かったところを話し合って発表しました。

授業の後は校長室で担任の先生とふりかえり給食ランチミーティング。オリザさんのコメントについて

質問がありました。そして先生から「いつも話さない子が自分のセリフを発表していた。」と聞いて、なによりうれしい取組になりました。





授業でさえも自分の気持ちを表現しなさいと指導します。フィクションはよっぽど先生の技量が高くない限り、手が出せないような指導要領になっている。ですから、子どもたちは慣れていないので、フィクションとは何かを説明しなくては上手いかなという事ですね。

兵庫県豊岡市は市内 38 の小中学校学校全てでこの授業を、すべて教員が行っています。演劇の手法を使ったコミュニケーション教育を 3 年かけて全校実施、全教員ができるように研修を続けてきました。モデル校を定めて私が授業をしてそれを見てもらって、夏休みの研修もワークショップを受けていただいて。これからの教員にとっては一つ大きな能力として要求されてくるだろうということです。

音楽教育の素晴らしさもありますし、美術教育の素晴らしさもあるんですが、演劇教育の強みは、役割分担がしやすいという事なんですね。居場所が作りやすい。話さない役も作れる。居ないという役さえ作れます。声の小さい子は、声が小さな子という役をやらせれば一番うまいんです。「すごいね、声の小さい子上手いね」と言っていると、その子はだんだん自信持ちちゃって、声が大きくなって声小さい子の役ができなくなってきちゃうんです。音楽とかだと、どうしても技術を競ってしまうところがでてるんですけども、演劇の場合にはいろんな個性を生かしやすい。

これからの日本社会、あるいは日本の学校教育の中で一つの大きな課題は、多様性を力にしていこうという事。多様性を理解して、その中で協働性を育む。価値観を一つにする方向ではなくて、価値観がバラバラな中で、そのバラバラな価値観を逆にプラスに行かしていく。演劇教育の役割は非常に大きいのではないかということです。

### 「何を学ぶか」より「誰と学ぶか」が大切

例えば、ハーバード大学とかマサチューセッツ工科大学 MIT です。あるいは日本の京都大学とか。今、授業内容をどんどんインターネットで公開しています。変な話ですよ。受験でせっかく受かって、高い授業料払っているのに授業をインターネットでも見られるんです。でも、先端的な大学ほどそうしています。なぜなら、インターネットの時代に知識や情報を囲い込むことは無理で

す。知識や情報はオープンにしなければならない。今、地方の高校生の受験勉強様変わりですね。小さな予備校はどんどん潰れて、みんなインターネットで林修先生の授業とか見ている。

昔は京都や大阪、あるいは東京まで行かなければ得られない情報や知識があった。でも、今はインターネットの時代ですから、知識や情報ならどこにいても得られるんです。最先端の、しかも動画で得られる。最高の授業が受けられます。そのインターネットの時代を前提にして、それでもハーバードに来ていっしょに議論することが大事なんだ。MITでともに学ぶことが大事なんだ。これが、大学に残された唯一の役割なんだというのが、世界の最先端の大学の基本的な考え方です。そこでは「何を学ぶか」よりも「誰と学ぶか」が大事。これは学生だけでなく、教員も職員も含めて、どんな学びの協働体を作っていくかという事が大学に問われているわけです。

ちなみにアメリカはもう、従来型の学力で取るのは上位 2 割と言われていています。残りは全部多様性で取るんですね。ディスカッション型の授業が中心になってきますから、富裕層もいれば、中間層もいれば、困難な家庭出身の子もいてもらわないと、いろんな意見が出てこない。ある社会問題に対して、あるいは、いろんな宗教、いろんな人種、いろんな民族、それから男性、女性、LGBT いろんな人がいてくれないと議論が活性化しない。

例えば東京の開成中学校、高校。東大に一番入る中高一貫校ですけども、ここは今年から家庭の所得 400 万以下の世帯について特別な枠を設けました。優先的に入れると。富裕層の家庭の子ばかりになってしまうとアクティブラーニング化が成功しないので、意図的に困難な家庭の子を入れる。それ





を、日本最高峰の私立の中高一貫校がもう始めています。日本列島もそういう状況になってきています。最近の言葉でいう「じあたま」を問うような問題に入試になってくる。ということは小学校中学校での学びが実は非常に重要になってくるということなんです。高校に入ってからでは間に合わない。だから、小学校、中学校でこういったコミュニケーション教育とか、アクティブラーニングを入れないと、間に合わないという事なんです。

### 身体的文化資本の格差は見つけにくい

さて、こういった能力のことを社会学では「身体的文化資本」と言います。フランスの社会学者ピエール・ブルデューという人が提唱した概念。コミュニケーション能力とか、センスとかですね。

この、身体的文化資本というのは、本物、いいものに触れさせるしかないと言われていています。美味しいもの、安全なものを食べさせ続けることによって、危険なもの、まずいものをペツと吐き出す能力が培われる。あるいは骨董品の目利きですね。あれね、本物だけを見せ続けるそうなんです。そうすると偽物を見抜く力が備わる。身体的文化資本は、体に落とし込んでいかなければいけない。でも、もしそうだとしたら、私がやっているような演劇とか、ダンスとか、オペラとか、ミュージカルとかパフォーマンス舞台芸術は、東京の子が圧倒的に有利です。

例えば、六本木赤坂のある東京都港区は、小学校6年生サントリーホール全員招待です。港区に日本一のコンサートホールであるサントリーホールがあって、サントリーホールが地域還元事業としてやる事業です。あるいは世田谷区は日本語特区で、週に1回国語以外の

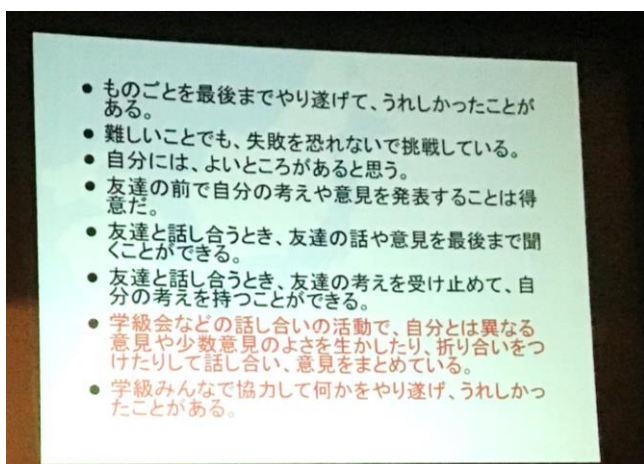
音声言語活動があります。独自で立派できれいな教科書を作っています。今回のオリンピックの総合演出になった野村萬斎さんが芸術監督をやっている世田谷パブリックシアターという日本一の公共ホール、そこに依頼をすると世田谷区の予算でプロの俳優や狂言師が世田谷区内の小中学校に派遣される。毎年世田谷区の3分の1の小中学校で、子どもたちはプロの俳優や狂言師から音声言語活動の授業を直接受けることができます。もっとわかりやすい例でいうと、今全国に演劇やダンスを本格的に学べる学校が80くらいあります。しかし、そのうちの6割が東京と神奈川に集中している。東京、神奈川、大阪、兵庫で8割です。

特に筑紫野市のような近郊都市では、親がクラシックを好きだったら博多でいいコンサートがあれば、子どもを連れて行きますよね。九博でよい展示があれば、子どもを連れて行きますよね。でも、行かない家庭は全然行かないじゃないですか。だから、行く家庭と行かない家庭で文化的な体験がスパイラル状に差が開いていってしまう。すごい過疎の村とかで、みんなが行けないというなら仕方ないんですけど、こういった近郊都市は一番文化的資本の格差が開きやすい環境にあるという事なんです。

日本は明治以降150年かけて教育の地域間格差のない素晴らしい国を作ってきました。でも今これが、文化の地域間格差と経済格差の2方向に引っ張られて、子どもたち一人ひとりの身体的文化資本の格差が広がっている。しかもこれが大学入試や就職に直結する時代になってきたということです。

### 文化政策と教育政策を連動させ自治体で一本化することが大切

小さな地方自治体ほど、文化政策と教育政策を連動させて、子どもたちひとり一人に身体的文化資本が蓄積されるような教育に、教育の質を変えていかなければいけない。筑紫野市の文化会館が主宰で、教育委員会に働きかけてモデル授業が実施出来たり、こういう講演会ができてたりして。ここが大事なわけです。文化政策と教育政策をバラバラにするのではなくて。子どもにとっては同じことなんです。両方とも学力につながる事なんです。



ここをきちんと自治体で一本化させて、子どもたちのために、子どもたちの身体的文化資本が育つような教育に、教育の質を変えていく必要があるんじゃないかということなんです。

**非認知スキルに効果**

**「演劇コミュニケーション授業」の狙い**

昨年度、お茶の水大学の浜野隆(はまの たかし)先生の研究室が大きな調査研究の発表をして教育界で話題になりました。全国学力テストの追跡調査です。小学生の家庭、中学生の家庭 7 万件ずつを追跡した非常に大規模な調査です。そこでわかってきたことは、親の収入や学歴、SES(家庭環境)が高いほど、学力テストの成績も高い。これは現実です。これは平成 25 年度の調査でもこんなに教育格差が広がっているんだと話題になりました。

しかし、今回の追跡調査でさらにわかってきたことは、ばらつきがあるという事です。ぶっちゃげというと、お金持ちの家の子でも成績の悪い子もいる。そして、困難な家庭の子でも成績のよい子もいる。

非認知スキルという言葉があります。この調査では、学力テストやIQ、知能指数なんかのように、数値で表せる学力以外の能力のことを全部「非認知スキル」の指標としています。忍耐力とか、自制心とか、モチベーション、集中力とかあらゆる概念が非認知スキル、非常に大きな概念だと思ってください。

非認知スキルは、家庭環境とはあまり関係がないという事が分かりました。意外だったんですけど、中3になってもあまり開きがでない。すると仮説がでできます。

「SESの高低にかかわらず(SSESが相対的に低い場合でも)、「非認知スキル」を高めることができれば、学力を一定程度押し上げる可能性がある。」但し、相関性が緩やかなのと因果関係が説明しにくいので、本当のところはわからない。しかし仮説としてはそうだと。

今回の調査で困難な家庭この子で成績が高い子たちは、どんな非認知スキルが高いかという事については、わかってきました。  
 ・ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある。  
 ・難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している。  
 ・自分には、よい所があると思う。  
 ・友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ。  
 ・友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができる。  
 ・友達と話し合うとき、友達の考えを受け止めて、自分の考えを持つことができる。さらに、学級会などの話し合いの活動で、自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけてりして話し合い、意見をまとめている。  
 ・学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある。まさに、演劇コミュニケーション教育が狙っていたのはここです。

**保護者の子どもへの働きかけと子どもの学力の関係**

別のデータもあります。小学校 6 年生の学力テストの上位 25%のA層と、下位 25%のD層の家庭環境などの、保護者の子どもへの働きかけを調査したものです。国語と算数ですね。

一番はもちろんこれです。「家には漫画や雑誌を除く本がたくさんある。」A層とB層で 24.6 ポイントも差がある。そして次が「子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした。」17.9 ポイント。そして面白いのがこれです。「博物館や美術館に連れて行く」15.9 ポイント、非常に高いんです。

もっと、ショッキングな数字があります。「ほとんど毎日、子どもに「勉強しなさい」という」マイナス 5.7 ポイント。子育て中の

「ほとんど毎日、子どもに「勉強しなさい」という」マイナス 5.7 ポイント。子育て中の

表 2-1 保護者の子どもへの働きかけと子どもの学力の関係

「とても」と「まあ」の合計	国語			算数		
	A層	D層	差(A-D)	A層	D層	差(A-D)
子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした	80.9	63.0	17.9	79.1	67.4	11.7
博物館や美術館に連れて行く	37.9	22.0	15.9	34.4	20.7	13.7
ほとんど毎日、子どもに「勉強しなさい」という	51.2	56.9	-5.7	49.5	56.8	-7.3
毎日子どもに朝食を食べさせている(はい)	93.2	82.8	10.4	91.0	81.8	9.2
子どもの勉強をみて教えている	59.7	58.8	0.9	57.4	58.5	-1.1
子どもに一日の出来事を聞く	87.1	86.0	1.1	88.6	86.1	2.5
子どもを決まった時間に寝かすようにしている	85.3	78.9	6.4	83.3	79.0	4.3
ニュースや新聞記事について子どもと話す	75.6	64.8	10.8	73.3	63.8	9.5
家には、本(マンガや雑誌を除く)がたくさんある	72.6	48.0	24.6	67.3	52.4	14.9



## 子どものための表現教育広め隊

お父さんお母さん気を付けてくださいね。このD層の親は勉強しなさい、勉強しなさいと言っているけど、美術館には連れて行っていない親です。アメリカの似たような統計では、劇場・ミュージカルに連れて行くという数字も出ています。

浜野先生に直接伺ったんですが、同じ所得層でも美術館や博物館に連れて行く家庭と、行かない家庭では有意な差が出るそうです。所得とは関係ないんです。当然、行けない家庭もありますよね。連れて行きたくてもいけない家庭もありますよね。

こういった公共ホールで子ども向けのワークショップとかを主宰しても、本当に届けたいところに届かないんです。だから、公教育でしっかりと全面的にやるしか道がない。公教育の役割がこれからもっとも大切になってきます。あるいは、図書館とか社会教育と連動して、子どもたち一人ひとりの身体的文化資本をつけるということです。

### 21世紀を生きる子どもたちにコミュニケーション能力を。無理のない範囲で少しずつ

最後に整理しますと、子どものコミュニケーション能力は上がっているくらいなんです。音感とかリズム感とかみんなすごくよくなっていますよね。でも、グローバル化によって社会が要求するコミュニケーション能力がもっと高くなっている。しかも、子どもが育つ環境はコミュニケーションが要らない方になっている。みんなわかっている、みんな察してあげる社会。このギャップが広がっているんだと思います。ギャップを埋めるのは今のとこ



ろ、学校教育しかないという事。だって、そうですね。家庭がダメで、地域がダメ。これを学校教育が補っていかなくてはいけない時代になってきている。全面的に担う必要はないんですけど、家庭も大事ですし、地域社会も大事なんですけど、ある一定量学校が補っていかないと、そこから漏れる子どもたちがたくさん出てくるような時代になってきたという事です。ただヒステリックにコミュニケーション教育と言っても、子どもを追い詰めるだけになってしまう。そうではなく、子どもたちの能力が低下しているのではなく、社会の変化に教育のシステムがついていっていない。だからこれをちょっとずつでも、よくしていきましょう。先生方も本当にお忙しいことと思います。無理のない範囲で、でも少しずつ、子どもたちがこの21世紀を生きてゆけるような能力の一つとして、コミュニケーション能力が培えるような授業を組み立てていただければと思います。

駆け足ではありましたけれども、時間が来たのでこれで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。



子どものための表現教育広め隊は、オリザさん率いる「青年団」の最後の冒険、江原河畔劇場のクラウドファンディングを応援しています。HP▶  
<https://www.makuake.com/project/ebara-riverside/>